

紹介

鹿野政直著

『鳥島』は入っているか

——歴史意識の現在と歴史学——

本書の表題は、一九六二年の島尾敏雄の講演「私の見た奄美」に由来している。

各種の日本地図を見ますと、種子、屋久までは書き入れてありますが、その南の方はたいてい省略されています。それは地図の紙面がないということだけではないうです。われわれの意識の底にそこははずしてもいいというような感覚が残っているのです。たとえば奄美の地図を書く時に、徳之島の西の方の鳥島を落としていても平気だという気持をなくしたいのです。と同時に、日本の歴史の中で、あるいは日本人の中で、はじっここのほうだから、落としていいというふうな考え方を是正していかなければならないと考えるわけです。

「斬り捨てる」のとは対極の思想が表明されたこの思想を啓示とした著者が、「わ

たくしたちの歴史学には、はたして『鳥島』は入っているか」という問いを投げかけ、戦後歴史学の可能性を探ろうとしたのが本書である。

まず「Ⅰ 歴史学の自己点検」において著者は、七〇年代の半ばを境にして、それまで国民の歴史意識を啓発・指導してきた歴史学が、国民のいまある歴史意識を受けとめ、自己を再構成するということを課題にしなければならなくなったとし、そうした中で戦後歴史学がどのように方法や視角の自己点検を行ってきたか、ということを経々な著作を取り上げながら紹介している。

「Ⅱ 「戦後」意識の現在」で述べられているのは、「戦前」とは異なる意味での「戦後」を擁護し、さらにそれを超えようとする苦闘である。戦後歴史学は、「戦前」への緊張感を持った「批判としての『戦後』的日本史像」を打ちたててきた。しかし、国民のがわにおいて、もう一つの「自己肯定としての『戦後』的日本史像」ともいべき「戦後」意識（司馬遼太郎をその代表とする）が出現したとする。さらに六〇年代以降、「戦後」意識の消去が政策的に推進され、一定の物質的裏づけをもって進み、

歴史学における「戦後」意識への固執・擁護と、国民の側における「戦後」意識の消滅との乖離が最大の難問となったのである。このような動きに対するものとして著者が注目しているのが「される側」の視点である。これは高度成長によって、いわゆる「強者」（Ⅱ「する側」）に立つようになった日本人に、その対極の側を照らし出すことになり、さらに「される側」への視野がひらかれていくことにより、主体性の回復が可能となる、としている。著者は、その「される側」の視点の造形を多くの著作を引用しながら描き出している。

「Ⅲ 人間論の現在」では、戦後における「民主化」から「近代化」へのすり替え、管理社会の強化による精神の疎外と荒廃の進行などが様々な角度から指摘されている（このように未来が見えにくくなったことと結びつけて、著者は社会史の現代に投げかける意味として、これまでの歴史学が軸としてきた「時間」にかわり「空間」を設定し、それを凝視するようになったことを挙げている）。しかし、このような中から「人間が人間であろうとする動き」も萌し始めており、現代の矛盾と課題が「差別」

「人權」という枠組で急速に意識化されたことが強調されている。そして、このような枠組から、私達は想像力を回復することができ、ますます見えにくくなっている種々の抑圧の構造が少しでも見えてくるようになるのである、と述べている。

「Ⅳ 日本文化論の現在」では、戦後五変を経て現在に至ったと著者が考える日本文化論の新しい特徴として、国際性の強調、未来論との結合、経済論的視角の優位、皇室への即自的な収斂ではなく様々の「原形」を提示していること、の四点を挙げている。

そして、これに立ち向かう途として、一般論としては、広い意味での運動史研究の視野を持つこと、国家の側からでないもう一つの日本文化論を提示すること、の二つを挙げ、さらに著者自身の問題として、天皇へのこだわり、戦後民主主義の土台として戦争責任の確認と究明を据えることの二つを挙げているのである。

本書においては、日本社会が抱えている皆さんの矛盾・問題点が様々な視点から繰り返し指摘されている。これらはあまりにも大きなものばかりであり、著者自身の言葉を借りれば「逆風を一挙に逆転させる

機運は、いま、たぶんない」のかもしれない。しかし、本書で著者が提示している視点や枠組みはこれらの矛盾・問題点に立ち向かう基盤となるものであり、それに基づいてどのように研究あるいは運動を行っていくかは、私達自身（狭い意味での歴史研究者でなく、もっと広い範囲の人々）に突きつけられた課題と言えよう。その意味で本書は特に若い世代の人達にとっての必読の書の一つになるのではあるまいか。

なお言うまでもないことであるが、本書は巻末にある膨大な掲載文献索引からでもわかるように、この短文では紹介しきれないような奥深く多彩な内容をもっている。

私の拙ない文章によって、かえって本書の価値が損なわれてしまうことを恐れる。著者および読者の御寛恕を請う次第である。

(A五判 三〇六頁 一九八八年一月
岩波書店 二二〇〇円)

(西山伸 京都大学大学院生)

David Carpenter,

The Battles of Leues and Evesham 1264/65

イングランド議会史上で名高いシモン・ド・モンフォールの乱にかかわる二つの戦闘を研究対象とする本書は、異色の戦争史である。著者デイヴィッド・カーペンターはロンドン大学キングズ・カレッジで歴史を教える気鋭の中世史家であり、リニイス(一二六四年)とイヴシャム(一二六五年)の二つの戦闘を扱う本書において、参加者数からはじまり、戦闘時刻、場所、陣形、行軍ルート、天候、降伏場所に至るまで、手堅く実証してゆく。その際、古地図や方言研究の成果を用いて新解釈を試みるなど、意欲十分である。と同時にそこには、当時の国制に関する著者の考え方が比較的明瞭に示されている。

著者は通説が看過、あるいは軽視していた、諸史料間の矛盾する点を整理、解決してゆきながら、シモン軍と国王軍双方の作戦と軍事行動が、決して偶然や無思慮によ